

基盤 A・B・C(一般) 1

平成 15 年度 基盤研究 (A・B・C)(一般) 研究計画調書 (新規)

注 1. 別途平成 15 年度基盤研究 (A・B・C)(一般) 研究計画調書作成・記入要領 (鶯色) を参照してください。
注 2. 印の欄は研究機関において記入してください。

基盤研究		A・B・C		研究	(1)・(2)	審査区分	一般	機関番号	
								整理番号	
審査 希望	分野	分科		細目				細目番号(4ケタ)	
	人文学	言語学		言語学				3001	
部門	分割番号	総合・新領域	A・B		分割番号が付されている細目を選択した場合、				
		基盤研究(C)	1・2		どちらかに必ず を付すること(「作成・記入要領」2. を参照)				
ふりがな		くんじたかお			所属研究機関 ・部局・職		神戸松蔭女子学院大学・文学部・ 教授		
研究代表者氏名		郡司隆男 印							
研究課題		日常的推論の論理と言語形式: 量化表現、条件文、モーダル表現を中心として							
研究経費 (千円未満の 端数は切り 捨てる)	年度	研究経費 (千円)	使用内訳(千円)						
			設備備品費	消耗品費	国内旅費	外国旅費	謝金	その他	
	平成 15 年度	11,970	1,260	2,280	1,490	4,800	860	1,280	
	平成 16 年度	11,640	420	2,220	1,600	5,020	970	1,410	
	平成 17 年度	12,858	420	2,150	1,750	5,870	1,158	1,510	
	平成 18 年度	13,525	330	1,360	1,790	6,000	1,205	2,840	
	総計	49,993	2,430	8,010	6,630	21,690	4,193	7,040	
研究組織 (研究代表者及び研究分担者) (研究分担者も、本研究計画に常時参加する者です。)									
氏名(年齢)	所属研究機関・部局・職		現在の専門	学位	役割分担 (本年度の研究実施計画に対する分担事項)			平成 15 年度 研究経費	
郡司 隆男 (51)	神戸松蔭女子学院大学・文 学部・教授		言語学	Ph.D.	研究全体のとりまとめ、 量化表現の統語論・意味論的考察			5,770	
有田 節子 (41)	大阪樟蔭女子大学・学芸学 部・助教授		言語学	文学修士	条件文の統語論・意味論的考察			1,200	
今仁 生美 (47)	名古屋学院大学・外国語学 部・教授		言語学	文学修士	量化表現の意味論的考察			1,300	
片桐 恭弘 (49)	ATR・メディア情報科学研 究所・室長		計算機科学	工学博士	文脈の論理的性質の考察				
坂原 茂 (53)	東京大学・大学院総合文化 研究科・教授		言語学	Ph.D.	日常的推論の表現の論理的考察			1,300	
田窪 行則 (52)	京都大学・大学院文学研究 科・教授		言語学	文学修士	モーダル表現の統語論・意味論性質の考察			1,200	
三藤 博 (44)	大阪大学・大学院言語文化 研究科・助教授		言語学	文学修士	量化表現と条件文の意味論的考察			1,200	
海外共同研究者									
Stefan Kaufmann (35)	Northwestern Univ.・ Linguistics・Assistant Professor		Linguistics	Ph.D.	海外共同研究者間のとりまとめ 英独語の条件文の意味論的考察				
Kai von Fintel (40)	MIT・Linguistics and Philosophy・Associate Professor		Linguistics	Ph.D.	英独語の量化表現と条件文の意味論的考察				
Chungmin Lee (63)	Seoul National Univ.・ Linguistics・Professor		Linguistics	Ph.D.	韓国語の量化表現と条件文の意味論的考察				
Peter Sells (46)	Stanford Univ.・ Linguistics・Professor		Linguistics	Ph.D.	条件文の比較統語論的考察				
Jae-Il Yeom (45)	Hongik Univ.・English Language and Literature・Professor		Linguistics	Ph.D.	韓国語の日常的推論の意味論的考察				
合計 7 名	(うち他機関の分担者 6 名)		研究経費合計(研究(1)のみ該当)			11,970			
基盤研究 (A・B・C)	研究機関名	神戸松蔭女子学院大学		研究代表者氏名	郡司 隆男				

研究目的

- ① 科学研究費の交付を希望する期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、
- ② 当該分野におけるこの研究(計画)の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義、
- ③ 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、
 について焦点を絞り、具体的かつ明確に記入してください。

① 背景と目標

本研究は、推論および推論に関わる言語形式の研究を通じて、日常言語における推論がどのような形でなされるのかを考察し、論理形式と日常言語との相関関係を探求することを目的とする。

一般に、推論の形式自体は原則として母語に依存しないと考えられるが、言語によっては、推論の形式を言語形式で明示しない場合がある。また、ある種の推論形式が言語的に区別されない場合もある。例えば、英語は論理、推論に関わる表現形式は、比較的単純な体系のものしかもっていないのに対して、日本語では論理・推論に関わる表現形式は非常に複雑で精緻な区別をもつ。

具体例を上げれば、英語では、義務的必然性 (deontic necessity) と認識的必然性 (epistemic necessity) はどちらも同じ助動詞 must であらわされる。また、義務的可能性 (deontic possibility) と認識的可能性 (epistemic possibility) のどちらも同一の can であらわされて、異なる語彙を用いない。したがって、両者は文脈によって区別するしかない。これに対して、日本語では、これらはすべて語彙的に区別される(「～ねばならない」と「～にちがいない」、「～ができる」と「～でありうる」)。

さらに、英語のパラグラフ構成においては、文と文の間の論理関係を接続詞などで明示化することは義務的ではなく、読者の解釈に依存する面が大きい。これに対して、日本語では、ソ系の指示詞を用いた表現(「それで」「そして」)や、「～のだ」「～からだ」などの文末表現などによって明示化するのが原則である。すなわち、英語のパラグラフ構成は文脈が与える論理構造によって支えられている一方、日本語では、パラグラフを構成する文の論理的な寄与は、接続詞や文末の助動詞を用いて言語表現によって支えなければならない。

本研究では、計画年度内に、日本語と、英語などの西欧語、および類型論的に日本語に近い韓国語を対象として、推論の表現形式におけるこれらの言語間の差異と類似性を網羅的に調べ、言語の普遍性と個別性の問題に新たな観点から焦点をあてることを目標とする。

② 学術的な特色・独創的な点

本研究では、上記の日英語の違いをさらに一般化して、論理関係の言語的明示化という観点から、言語を文脈依存型(非明示型)の言語と、言語表現依存型の言語に分類することを提案する。その場合、上記の予備的な観察からは、英語は文脈依存型、日本語は言語表現依存型の言語ということになる。これは従来、代名詞の用法などから言われている、日本語の文脈依存性という観点とは異なった観点からの分類になるが、推論形式を中心とした論理表現に緻密に調査することにより、われわれの観察がより広いデータで裏づけられることを示す。

③ 国内外の関連する研究の中での位置づけ

欧米の言語学、特に形式的なアプローチをとる言語学においては、言語における文の意味の研究は、その真理条件を与えることを主たる目標としてきた。意味の研究は、話し手、聞き手の知識や信念から独立して研究され、また、そのような研究が可能であるという前提のもとにおこなわれている。真理条件的意味論はその形式的な装置とあいまって文の意味理解に大きく貢献をしてきた。しかし、実際の言語使用において話し手や聞き手がその真偽値を 100%確信して文を使用することは稀であり、多かれ少なかれ、「部分的な知識」や「未確認の情報」「不十分な証拠」などに基づいて文を発している。したがって、文が真(あるいは偽)であることは、話し手や聞き手の言語使用に関するさまざまな現象を説明するのにさほど役には立たない。

文があらわす情報を取り出すためには、文の真偽(だけ)ではなく、その文が使用される文脈において言語使用者の利用する背景の知識や文脈情報が必要となる。近年、このような観点から形式的意味論の内部からも背景の知識や文脈情報に言及する理論的なアプローチが提出されてきている。

一方、日本における日本語研究は、語や構文の使用法に関する研究が主とされている。さまざまな語の記述や構文の用法に関して膨大な資料が蓄積されてきてはいるが、これらの研究が十分な形式化を伴ってなされることは稀である。言語表現自体の意味を研究すべき意味論と、言語表現とその使用者との関係を研究すべき語用論との区別が、往々にして曖昧にされ、多くは主観的で、非形式的な議論が行われてきたため、議論が日本語および日本内部にとどまっている。

本研究では、日本語において形式意味論的な分析を進めるとともに、それと並行して、西欧語の文脈依存性という非形式的側面を明らかにし、それぞれの言語において従来手つかずである面を補完するものである。

(「研究計画最終年度前年度の申請」(公募要領 13 頁を参照)として新規申請する場合のみ記入)

特別推進研究又は基盤研究による研究計画及び研究成果

(研究代表者として行っている特別推進研究及び基盤研究のうち研究期間が 4 年以上で、かつ、平成 15 年度が最終年度に当たる研究課題の当初研究計画及びこの研究によって得られた新たな知見等の研究成果について具体的かつ明確に記入してください。)

研究種目名	審査区分	課題番号	研究課題名	研究期間
		. .		平成 年度 ~平成 15 年度

当初研究計画及び研究成果

Blank area for entering the initial research plan and research results.

従来の研究経過・研究成果または準備状況等 (I 及び II を区別するため、I を記入後は点線を引いて分けてください。)

- I. この研究課題又はこれに密接に関連した研究課題で、研究代表者が従来受けた科学研究費補助金の研究種目、期間(年度)、研究課題名、研究経費を記入のうえ、それぞれの当初の研究計画、研究経過及び研究成果等について、具体的かつ明確に記入するとともに、その研究成果をふまえて研究をどのように発展させていくのか、また、準備状況等について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記入してください。
- II. I 以外で、この研究課題又はこれに密接に関連した研究課題で受けた、科学研究費補助金以外の研究費(他府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費を含む。)におけるそれぞれの研究経過・研究成果等について、名称、期間(年度)、研究課題名、研究者(研究代表者又は研究分担者)氏名、研究経費を記入のうえ、具体的かつ明確に記入してください。

研究代表者の郡司は、制約に基づく文法理論の研究を中心に、日本語の統語論および意味論、特に制約に基づく文法理論の研究グループを長年以上にわたって組織してきた。昭和 61 年度 - 平成元年度には科学研究費特定研究「言語情報処理の高度化」計画研究分担者(研究協力者 三木邦弘、研究費総額約 1000 万円)、平成 3 年度 - 5 年度には科学研究費一般研究「日本語句構造文法に基づく効率的な構文解析の研究」の代表者(研究分担者 三木、研究費総額 690 万円)をつとめた。これらは、いずれも、計算言語学的な観点から制約に基づく文法の有効性を実証的に追究したものであり、日本語に対して明示的な統語構造と意味表示を与える試みの初期のものである。その成果はそれぞれの研究の年度毎の報告書に述べられている。

さらに、郡司は、平成 6 年度から平成 7 年度にかけては、科学研究費国際学術研究代表者として、アメリカ合衆国スタンフォード大学との共同研究、Studies on the Universality of Constraint-Based Phrase Structure Grammars を組織した(分担者 Ivan Sag, Peter Sells, Dan Flickinger, 橋田浩一、白井英俊、原田康也、五十嵐義行、白井賢一郎、外池俊幸、今仁生美、宇田千春、松井理直、中川裕志、津田宏、矢田部修一、研究費 総額 1530 万円)。この研究は、日本語と英語にまたがる制約概念の普遍性を追究するものであり、その成果は、論文集、GUNJI, T., ed., *Studies on the Universality of Constraint-Based Phrase Structure Grammars*, Osaka University (Report of the International Science Research Program Joint Research, Project No. 06044133)、として印刷し、関係方面に配布、公表した。また、今回申請の研究の分担者の今仁、海外共同研究者の Sells との共同研究は、このころから始まっている。

平成 9 年度から平成 11 年度にかけては、科学研究費基盤研究 B「制約に基づく文法の連続量の概念を取り入れた拡張の研究」を組織し(分担者 松井理直、大谷朗、松本裕治、宮田高志、橋田浩一、白井英俊 研究費 総額 1440 万円)、主に計算論的観点から制約に基づく文法の拡張の研究をおこなった。これは、昭和 61 年度 - 平成元年度および平成 3 年度 - 5 年度の研究の流れをくむものであり、主に計算言語学的な観点から、日本語に対して明示的な統語構造と意味表示を与えることの有効性を実証的に追究したものである。その成果は、最終年度に報告書として印刷し、関係方面に配布、公表した。

さらに、平成 10 年度から平成 12 年度にかけては、科学研究費基盤研究 C「統語情報と意味・談話構造を統合する言語モデルの研究」(研究代表者 田窪行則、研究費総額 370 万円)の分担者として、主に意味論分野で、量化と名詞句の解釈を中心に研究を進めた。この研究は、今回申請の研究の分担者の田窪が代表者をつとめ、分担者の坂原、三藤も参加し、統語構造と文脈的情報がどのような相互作用をするかを見た。特に、坂原、三藤の研究では、本研究のテーマである条件文とモーダル形式に関する意味論と語用論が取り扱われており、本研究の直接の準備となっている。その成果は報告書として印刷し、関係方面に配布、公表した。

平成 12 年度から平成 15 年度にかけては、科学研究費基盤研究 B「言語における制約間のインターフェースに関する総合的研究」(研究代表者 西垣内泰介)の分担者として、主に量化表現の解釈、日英語の語順と屈折現象を中心に研究を進めている。

これらを通じて、日本語を中心とする言語の明示的な統語論、意味論を制約という概念を用いて記述することの有効性および、そのような記述の他言語と比較した場合の一般性、普遍性がある程度明らかになったが、その運用形態や変異のメカニズムについては明確ではない。特に、言語形式から一見して独立であるかのように見える推論のパターンには文脈情報も使われると思われるが、それは従来の制約による文法理論では十分にとらえられていない。また、制約に基づく理論が本当に普遍的なものであるならば、日本語を中心として観察される現象にとどまらず、英語、ドイツ語などの西欧語や韓国語などにおいて観察される現象にも適用されるはずである。もちろん、これらの言語が日本語とまったく同じようにふるまうことは期待されず、その違いも、いわゆるパラメータ的変異として、理論の許す幅の中でとらえることができるだろう。

この点を国際的かつ学際的な研究により解明することが本研究の目的である。

基盤研究 (A・B・C)	研究機関名	神戸松蔭女子学院大学	研究代表者氏名	郡司 隆男
--------------	-------	------------	---------	-------

従来の研究経過・研究成果又は準備状況等(つづき)

上記以外に、研究代表者の郡司は、昭和59年度 - 平成3年度には財団法人新世代コンピュータ技術開発機構(ICOT)の句構造文法ワーキンググループの主査(研究者 橋田浩一、白井英俊、原田康成、五十嵐義行、白井賢一郎、外池俊幸などのベテラン)として、同ワーキンググループを組織した。この研究では、制約に基づく文法理論の1つである主辞駆動句構造文法を用いた日本語の包括的な文法を作成することを目的とし、日本語のテンス・アスペクト、浮遊数量子の意味論的扱い、関係節の構造、文のレベルなどに関して一定の成果があった。その成果の一部は、Gunji, T. and Hasida, K. (eds.) *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*, Kluwer, 1999 として公刊されている。

また、郡司は、平成6年度には、国際日本文化研究センターの客員助教授に任用され、同研究センターでの共同研究として、「制約に基づく日本語の構造の研究」の代表者をつとめ(分担者 小野芳彦、橋田浩一、白井英俊、原田康也、五十嵐義行、白井賢一郎、外池俊幸、今仁生美、矢田部修一、富岡豊、中川裕志、オブザーバー 宇田千春、松井理直)、日本語の文法における制約の理論的な側面の研究をおこなった。その成果は、郡司隆男(編)、日文研叢書『制約に基づく日本語の構造の研究』(国際日本文化研究センター共同研究報告)として刊行して関係各方面に配布、公表した。

研究分担者の田窪は、1996年から2000年まで株式会社エイ・ティ・アール知能映像通信研究所からの委託で「コミュニケーションにおける談話管理の言語学的研究」というテーマで受託研究をおこなった。この研究は、英語と日本語の対応コーパスに基づいて、主に対話において談話参加者が談話を構成していく際に手段として用いる言語的談話構成標識を研究した。具体的な研究テーマは、ディスコースマーカ、指示詞、副詞類等多岐にわたる。この成果を報告書の形で提出し、国内、国外の学会で発表した。

研究分担者の有田は、日本語を中心に条件文の研究をおこなってきている。日本語は英語とは違って条件形式が複数(「～ば」「～たら」「～なら」)あるため、個々の言語形式の分布が問題になるが、従来の真理関数的アプローチでは、言語形式自体に対する説明力をもたず、特に日本語のような言語には不十分であることを指摘し、プロトタイプ論的観点から、日本語の条件形式の分布について分析している。最近では、条件文の前件と後件の関連性の違いによって個々の形式が使い分けられていることを明らかにしている。

また、有田は、郡司、田窪と以前から親交のあった Sells の学生であり、海外研究協力者の一人である Kaufmann がスタンフォード大学で条件文の形式的理論に関して博士課程を終えた後、日本学術振興会ポスドクター研究員として2001年10月から2002年8月にかけて京都大学に滞在中に、条件文の意味論についての共同研究を開始している。

Kaufmann はドイツの Tuebingen で日本学、日本語学を専攻し、Stanford 大学で形式意味論で学位を得た、日英語の条件文に関する諸現象にも精通している、形式意味論・日本語の専門家でもある。

有田と Kaufmann の共同研究では、特に、日本語の「～たら」条件文のテンス・アスペクト・モダリティの現象に注目し、従来の真理値とは別に“settledness”という新たな概念による形式化を提案している。この概念は言語普遍的なものと考えられるが、英語ではそれが言語形式に必ずしも反映されないのに対し、日本語では条件形式やテンス・アスペクト・モダリティ形式に明示的にあらわされる傾向にあることがこの共同研究により明らかになっている。この研究は申請する研究課題を進めていく過程でさらに発展させていく予定である。

以上の、代表者、分担者が関わってきた研究から、日本語のような、明示的な論理表現によって局所的な修辞構造を形成することで談話を構成する言語と、英語のような、パラグラフを単位として論理構成をおこない、明示的な言語表現にはそれほど頼らない言語との違いが、徐々に明らかになってきた。数年前から郡司、田窪、坂原、三藤、今仁、片桐はこのような観点にたち、理論的にも健全で、十分経験的実証にも耐えるモデル作成の可能性を追求してきている。

郡司は平成14年度には京都大学客員教授をつとめており、それを機会に、Kaufmann、郡司、田窪、それに Kaufmann の友人でもあり、郡司、田窪と長年さまざまな共同研究を重ねて来た ATR の片桐、さらに三藤、有田を交えて、週に1度定期的に京都大学で準備のための研究会を重ね、計画の細部を詰めると同時に、研究遂行のための最良のメンバーを集めるための討議を重ねて来ている。

その結果、郡司、田窪、片桐の長年の友人で、形式意味論の専門家であり、これまで、韓国語、英語の条件文、モーダル、数量詞に関して精力的に研究をしてきている韓国ソウル大学の Lee 教授、Lee 教授の推薦で Yeom 準教授にも共同研究への参加を打診し、参加承諾を得ることができた。また、Kaufmann の推薦で、形式意味論の専門家で、条件文に関する最新の理論家である MIT の von Stechow 準教授、Kaufmann の指導教員の一人であり、統語論、形態論の専門家で、日本語、韓国語、北欧諸語に通じている Sells 教授の参加を得ることができた。これらのメンバーはすでに Kaufmann が準備した計画立案書に基づいて、研究の概要を把握し、すでに独自の研究準備を始めると共に自分の国において分担課題に関する科学研究費を申請している。

研究計画・方法

(I 及び II を区別するため、I を記入後は点線を引いて分けてください)

- I. 研究目的を達成するための研究計画・方法を 15 年度と 16 年度以降に区分して、①主要設備 (現有設備を含む) との関連、②研究代表者・研究分担者の相互関係 (役割分担状況) (図式化する等) を含めて具体的に記入してください
 また、①高額或いは全体の研究費に比べその占める割合が高い設備品費、消耗品費、謝金、旅費等を必要とする場合、②設備品費又は研究支援者雇用費が各年度の申請研究費の 90 % を超える場合 (公募要領 10 頁を参照) には、これらの費用に重点をおかなければならない理由を記入してください。さらに、海外共同研究者 (公募要領 8 頁を参照) との共同研究を含む場合には、その必要性及びこれらの者とのように共同して研究を実施していくのかについて記入してください
- II. ①ヒトの遺伝子解析研究については、ヒト由来試料等の提供者、その家族・血縁者その他関係者の人権及び利益の保護の取扱いについて十分配慮する必要があること、②相手方の同意・協力や社会的コンセンサスを必要とする研究課題又はアンケート調査等を行う研究課題については、人権及び利益の保護の取扱いについて十分配慮する必要があること、③「生命倫理・安全に関する留意事項 (公募要領 14 ~ 15 頁を参照) 」に記載されている研究については、手続き等が必要とされていること、から、このような計画を含む場合には、計画について講じる対策・措置状況について具体的に記入してください。

I. 研究計画・方法は年次ごとに以下を予定している。

平成 15 年度

① 主要設備との関連

本研究は、共同討議がその大きな部分を占める。討議の前の準備のためのデータを得るために実験や調査もおこなうが、それらは、コーパスの収集、整理が中心であり、基本的には大がかりな設備は必要としない。研究費は基本的に設備品費以外のところにあてられるが、平成 15 年度には、設備品費として、本研究に関わる各分野の基本図書購入費の他に、コーパスの集積のために、大容量のハードディスク、および DVD 書き込み機能をもった記憶装置一式を購入し、今後のデータを蓄積していく予定である。

② 役割分担

「研究目的」でも述べたように、本研究では、話し手、聞き手の知識や信念が直接関わる言語現象をできるだけ多く取り上げ、「文の統語的構造に基づく文の真理条件的意味」と「言語使用において話し手、聞き手が利用する背景的知識、文脈情報」の両者の相互的作用が反映された理論を構成する。

多かれ少なかれどのような言語でも成り立つ特徴として、文を発するとき話し手がつける明示的な標識で、その文が条件つきで成立するか、十分な根拠があるか、どの程度の確信度を持って主張されているのか、などを示すものがある。これらの標識として機能するものとして、代表的でもあり、形式的に収集が容易なものがモーダル形式と条件形式であるため、本研究では、これらの言語形式の具体例をできるだけ多く収集し分析することにする。

平成 15 年度は、広く、日本語、英語およびドイツ語などの西欧語、韓国語のコーパスから、日常的推論、量化表現、条件文、モーダル表現に関わる言語現象を採集、分類し、理論的考察のための基礎データを作成する。代表者、分担者、および海外共同研究者のこれまでの業績から、概ね、以下のように各研究者が担当する現象を割り当て、それぞれの所属機関において、現象の収集、整理、分類、および予備的な理論的考察をおこなう。ただし、これらの現象は互いに密接に関連し合っているため、各人がこれらの 1 つの現象のみを担当するというのではなく、討議の際の話題提供者という程度に考えておく。中間結果は、海外共同研究者を含むメーリングリストを立ち上げ、頻繁にメールにて交換し合う。

言語表現	日本側分担者	海外共同研究者
量化表現	郡司、今仁	von Fintel (英語、ドイツ語)、Lee (韓国語)
条件文	有田、片桐、三藤	Kaufmann (英語、ドイツ語)、Sells (英語、北欧語)
モーダル表現	坂原、田窪	Yeom (韓国語)

基礎的な資料と活用することを予定しているものの 1 つに、分担者の片桐が所属する ATR の所有する膨大な対話コーパスがある。さらに、2 言語の対照的研究のための資料として、日本の日刊新聞とその英語版、米国の週刊誌 Newsweek とその日本語版、翻訳された書籍などのうち、電子的な形で加工が容易なものを網羅的に收拾する予定である。

以上の基礎的な考察を踏まえて、8 月下旬ないし 9 月上旬に、日本側分担者が訪米して、Stanford 大学において、1 週間程度集中討議をする場を設ける。Sells を除く海外共同研究者にかかる旅費は各人が自国で申請予定の研究費よりあてることとし、本科学研究費では、代表者および日本人分担者の旅費を支出する。この場では、初年度では、全体の大きな方針を決めることが中心となろう。研究が開始して間もないということもあり、それまでの各人の予備的な考察から出てきた問題的を総ざらいし、今後の各人の分担をより明確化することを目的とする。

その後、9 月下旬から翌年 2 月にかけて、またメーリングリストなどでの討議を続け、平成 16 年 2 月下旬に、1 年目の総まとめとして、関西で 1 週間程度の集中的討議の場を設ける。科学研究費より、海外共同研究者および、日本人分担者の坂原・今仁の旅費を支出する。

平成 15 年度にかかる研究費は、以上の海外旅費、国内旅費の他に、コーパスの購入費用、購入したコーパスの整理分類、簡単なタグづけのためのアルバイトへの謝金などが中心となる。消耗品には、コーパス整理のためのソフトウェア、および、DVD-RAM などの記憶メディアにかかる費用を計上した。

研究計画・方法(つづき)

平成16年度以降

平成16年度以降は、平成16年度と平成17年度は、ほぼ平成15年度と同じ形態で研究を進める。基本的に、半年の間各人の所属組織において研究を進め、その成果を8月下旬と2月下旬に、アメリカおよび日本での会合で集中的に討議する。研究費の内訳も平成15年度に準ずるが、研究成果の一部を国内外で発表する可能性が増えることを想定し、平成16年度から平成18年度にかけては、旅費の配分を次第に多めにしていく。また、コーパスデータの蓄積とともに作業量も増えるため、謝金を増額していく。

平成15年度は基礎的なデータを収集することに重点を置くが、平成16年度以降は、それを、できるだけ一般的、普遍的な形の理論としてまとめることを目標とする。特に、日本語と他言語の共通点と相違点を明らかにし、それが、言語の普遍性と個別性の問題とどう関わるかを考察する。

さらに、ある程度の一般化ができるようになれば、それを事実によって検証(ないし反証)するために、既存のコーパスとの一致を測るのみならず、一定の仮説が裏づけられるかどうかを実験的手法によって確かめることも必要となろう。本研究では大がかりな実験は想定していないが、分担者の所属機関の学生、ないしは分担者有田の所属機関の付属幼稚園の園児などを使って、大人の日常的推論のパターンおよび言語獲得過程における論理的表現の習熟度を観察する予定である。例えば、被験者に一定の状況を共通に与えて、それをどのように言語化して報告するか、そこに、言語の構造の影響と、対話者どうしの相互作用の影響と、どちらが大きいかなどを比較することを考えている。

特に、実際の発話の状況を考慮することによって、従来言語の構造の問題とされてきた現象を、その言語の話し手の置かれた状況での行動に帰着させる可能性を探る。研究の進展具合によっては、簡単なコンピュータシミュレーションによって、仮説を検証することも計画する。

II. 該当せず。

研究組織を研究(1)で組織する理由等(公募要領8頁を参照)

研究代表者と異なる研究機関に所属する研究者を研究組織の人数の1/2を越えて研究分担者として加える場合には、①当該研究の特殊性及び②当該研究計画の遂行上、研究(1)の組織形態でなければならない理由を必ず記述してください。

また、研究代表者と異なる研究機関に所属する研究者を研究分担者に加える研究であって、例えば、遠隔地に所在する研究機関において実施する一定規模の分担研究など、研究分担者に研究費の一部を配分しないと研究遂行上大きな支障がある場合には、研究費の一部を配分しなければ分担部分の研究実施が困難な理由を必ず記述してください。

本研究は多言語にわたる研究であるため、英語、ドイツ語、オランダ語、韓国語などの母語話者であり、かつ形式意味論的分析にも通じている研究者との共同作業でなければ成功しない。「従来の研究経過・研究成果または準備状況等」に述べたように、海外共同研究者はいずれも意味論・統語論の分野で確立された業績を有する研究者であり、単に母語話者としてデータを提供するのではなく、自らの直観に基づいた内省的な考察から、より深い分析を提供してもらえることが期待される。また、日本人研究分担者は、いずれも、日本語における日常言語の論理表現の分析に関する優れた業績を有する研究者であり、統語論・意味論、運用論にわたる本研究の広がりからも、必要とされる。また、上述のように、本研究の分担者、海外共同研究者は長年にわたって共同研究をおこなってきた実績があり、チームワークとして統一したテーマに取りくむのに適している。

また、「研究計画」でも各分担者・海外共同研究者の従来の研究分野は今回の申請のテーマの中のさらに細分化された分野をほぼ補完的に網羅する形になっており、どの研究者が欠けても、研究としての統一性を欠くことになる。

日本人研究分担者の大学に所属する者については、データの整理など、それぞれの研究機関において消耗品、謝金などを効率よく支出する必要がある。また、国内外の調査、打合せのための旅費などに関しても、各研究機関で効率よく研究を遂行するために、研究費のうち一定額を配分する。海外共同研究者にかかる旅費などの費用については代表者で一括して管理する。

研究業績				
最近5か年間に学術誌等に発表した論文、著書のうち本計画に関連する重要なものを選定し、研究組織欄に記入された研究者ごとに、現在から順に発表年次を過去にさかのぼって記入してください。なお、この頁で記入できない場合は、裏面を使用してください。				
研究代表者・分担者氏名 (所属研究機関・部局・職名)	発表論文名・著書名 (著者名、論文名、学協会誌名、巻(号) 最初と最後のページ、発表年(西暦)) (以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略(省略する場合、その員数と、掲載されている順番を番目と記入)しても可。なお、研究代表者及び研究分担者にはアンダーラインを付すこと。)			
郡司 隆男 (神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授) 有田 節子 (大阪樟蔭女子大学・学芸学部・助教授) 今仁 生美 (名古屋学院大学・外国語学部・助教授) 片桐 恭弘 (ATR・メディア情報科学研究所・室長) 坂原 茂 (東京大学・大学院総合文化研究科・教授) 田窪 行則 (京都大学・大学院文学研究科・教授)	郡司隆男, 『単語と文の構造』. 岩波書店, 2002. 今泉志奈子・郡司隆男, 語彙の複合における複合事象. 伊藤たかね編, 『文法理論: レキシコンと統語』, 33-59, 東京大学出版会, 2002. 郡司隆男, 主辞駆動句構造文法 (HPSG) の概要. <i>Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin</i> , No. 5, 23-42, 2002. 郡司隆男, 日本語研究—多様な観点から. 『日本語文法』, 1(1), 70-89, 2001 蓮沼昭子, 有田節子, 前田直子, 『日本語セルフマスターシリーズ 条件表現』, 1-86 ページ担当、くろしお出版, 2001. 有田節子, 条件文研究の最近の動向, 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』9号, 57-84, 2001 有田節子, プロトタイプから見た日本語の条件文, 『言語研究』, 115号, 77-107, 1999. 今仁生美, 宝島格, 照応とプロトタイプ. 『名古屋学院大学論集社会科学篇』, 38号4巻, 2002. 今仁生美, 宝島格, 意味理解と照応. 『日本認知科学会第19回大会発表論文集』, 90-91, 2001. 金水敏, 今仁生美, 『意味と文脈』. 岩波書店, 2000. Ichiro Umata, Yasuhiro Katagiri, and Atsushi Shimojima, Movement conceptualizations in graphical communication. In Mary Hegarty, et al. (eds.), <i>Diagrammatic Representation and Inference: Second International Conference, Diagrams 2002, Proceedings</i> , LNAI 2317, Springer, Berlin, pp. 3-17, 2002. Ichiro Umata, Yasuhiro Katagiri, and Atsushi Shimojima, Graphically speaking: Do graphics affect perspectives in event conceptualization? <i>The Proceedings of the Twenty-Second Annual Conference of the Cognitive Science Society</i> , pp. 896-901, 2002. Atsushi Shimojima, Yasuhiro Katagiri, and 2 others, Informational and dialogue-coordinating functions of prosodic features of Japanese echoic responses. <i>Speech Communication</i> , 36(1-2), 113-132, 2001. 坂原茂, トートロジとカテゴリー化のダイナミズム. 大堀壽夫編, 『認知言語学 II: カテゴリー化』, 105-134, 東京大学出版会, 2002. 坂原茂, テイルの多義性に対する制約としての3種類の動詞組み合わせパターン. 『二十一世紀的日本研究国際会議 論文集』. 11-22. 台湾大学日本語文学系, 2002. 坂原茂, メンタル・スペース理論から見たテンス・アスペクト. 『言語』30(13), 80-87. 大修館書店, 2001. 坂原茂, メンタル・スペース理論. 辻幸夫編. 『ことばの認知科学事典』. 316-332. 大修館書店, 2001. 田窪行則, 笹栗淳子, 日本語条件文と認知的マッピング. 大堀俊夫編, 『認知言語学 II: カテゴリー化』, 東京大学出版会, 135-161, 2002. 田窪行則, 談話における名詞の使用. 野田尚史他著, 『複文と談話』, 岩波書店, 191-216, 2002. 田窪行則, 現代日本語における2種のモーダル助動詞類について. 梅田博之教授古稀記念『韓日語文学論叢』, 刊行委員会編, 太学社: ソウル, 1003-1025, 2001.			
基盤研究 (A・B・C)	研究機関名	神戸松蔭女子学院大学	研究代表者氏名	郡司 隆男

研究業績(つづき)	
研究代表者・分担者氏名 (所属研究機関・部局・職名)	発表論文名・著書名 (著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦))
三藤 博 (大阪大学・大学院言語文化研究科・助教授)	田窪行則, 笹栗淳子, 「今」の対応物を同定する「今ごろ」について. 『言語学と日本語教育 II』くろしお出版, 39-55, 2001. 三藤博, イベント閉包から見た日本語の「ル」形の意味機能. 『自然言語への理論的アプローチ(意味編)』, 大阪大学言語文化共同プロジェクト 2001, 47-53, 2002. 三藤博, メンタル・スペース理論. 『日本ファジィ学会誌』, 13(4), 364-369, 2001. 三藤博, イベント意味論によるフランス語の現在形と半過去形の意味の分析. 『現代フランス語のテンス・アスペクト・モダリティー』, 大阪大学言語文化共同プロジェクト 2000, 37-45, 2001.
Kai von Fintel (MIT・Dept. of Linguistics and Philosophy・Associate Professor)	Kai von Fintel, Counterfactuals in a dynamic context. In Michael Kenstowicz (ed.), <i>Ken Hale: A Life in Language</i> , MIT Press, 123-152, 2001. Kai von Fintel, Whatever, <i>Proceedings from the 10th Conference on Semantics and Linguistic Theory (SALT 10)</i> , 2000. Kai von Fintel, NPI-licensing, Strawson-entailment, and context-dependency, <i>Journal of Semantics</i> , 16(2), 97-148, 1999. Kai von Fintel, Quantifiers and if-clauses, <i>The Philosophical Quarterly</i> , 48(191), 209-214, 1998.
Stefan Kaufmann (Northwestern University・Dept. of Linguistics・Assistant Professor)	Stefan Kaufmann, Tense probabilism properly conceived. <i>Proceedings of the Thirteenth Amsterdam Colloquium</i> , 132-137, Amsterdam (ILLC), 2001. Stefan Kaufmann, Probabilities of conditionals. <i>Proceedings of SALT XI</i> , New York University, 248-267, Cornell University, 2001. Stefan Kaufmann, Second-order cohesion. <i>Computational Intelligence</i> , 16(4), 511-524, 2000.
Chungmin Lee (Seoul National University・Dept. of Linguistics・Professor)	Chungmin Lee, Contrastive topic and proposition structure. In Anne-Marie di Sciullo (ed.), <i>Asymmetry in Grammar</i> , John Benjamins, 2002. Chungmin Lee and Jieun Joe, A 'removal' type of negative predicates. In N. Akatsuka et al. (eds.), <i>Japanese/Korean Linguistics 10</i> , CSLI, 2002. Chungmin Lee, Negative polarity in Korean and Japanese. In N. Akatsuka et al. (eds.), <i>Japanese/Korean Linguistics 10</i> , CSLI, 2002. Chungmin Lee and Chungye Han, On negative imperatives in Korean. <i>Proceedings of The 16th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation</i> , 2002.
Peter Sells (Stanford University・Dept. of Linguistics・Professor)	Peter Sells, <i>Structure, Alignment and Optimality in Swedish</i> . Stanford, CSLI Publications, 2001. Peter Sells, Chan Chung, Jong-Bok Kim, and Byung-Soo Park, Mixed categories and multiple inheritance hierarchies in English and Korean gerundive phrases. <i>Language Research (Journal of the Linguistic Society of Korea)</i> , Vol. 37, 763-797, 2001. Peter Sells, Three aspects of negation in Korean. <i>Journal of Linguistic Studies (Linguistic Society of Cheju)</i> , Vol. 6, 1-15, 2001. Peter Sells, Negative polarity licensing and interpretation. In S. Kuno et al. (eds.) <i>Harvard Studies in Korean Linguistics 9</i> . Harvard University, 3-22, 2001.
Jae-Il Yeom (Hongik University・Dept. of English Language and Literature・Professor)	Jae-Il Yeom, Reasoning with generics based on truth-conditional semantics. <i>Language Research</i> , 38(2), 585-617, 2002. Jae-Il Yeom, Semantics for default rules. <i>Language and Information</i> , 4(2), 69-92, 2000. Jae-Il Yeom, Integrated theory of dynamic and static information, <i>Korean Journal of Linguistics</i> , 24(3), 427-446, 1999.

